

それゆえ人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に一つの類的存在として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的(Fortwählig)な類生活なのである。この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる。それゆえ労働の対象は、人間の類生活の対象化である。(カール・マルクス『経済学・哲学草稿』p.97)

対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。すなわち人間が、類にたいして、自分自身の本質にたいするようふるまい、あるいは自己にたいして、類的存在にたいするようふるまう存在であることの確証である。(同書 p.96)

人間は、自然を自己の目的に役立たしめ、これを支配するのです。自然の暴力のまえに屈することなく、自然を逆に支配していくのです。試行錯誤の生産活動をとおして人間は自然の客観的な法則性をだんだん認識し、これを正しく適用する、と同時にそれによってまた、自分自身を変化させ、あたらしい素質をかくとくしてゆくのです。こうして、人間意識が発達し、自己意識が生まれ、予定計画的な、まえもつて知られた一定の目標にむけられた、すなわち合目的(マツ)な、生産的労働へ高められたのです。これが技術的実践にはかなりません。(黒田寛一『社会観の探求』p.56)

#### 労働対象の疎外

労働の実現は労働の対象化である。「しかし」国民経済的狀態のなかでは、労働のこの実現が労働者の現実性剥奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、「すなわち対象の」獲得が疎外として、外化として現われる。(カール・マルクス『経済学・哲学草稿』p.87)

#### 労働という活動の疎外

労働が労働者にとつて外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されなやかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的なエネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は頹廢化する、ということにある。だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、そして労働のなかでは自己の外にあると感ずる。(同書 pp.91-92)

#### 人間の本質の疎外

「疎外された労働」は、人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとつて疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神の本質を、要するに彼の人間の本質を疎外する。(同書 p.98)

唯物論の本質は、すべてのものがただ物質にすぎないとする主張のうちに存するのではなく、むしろ、それにしたがえばすべての存在者は労働の素材として現れてくるという一つの形而上学的規定のうちに、存するのである。労働の近代的・形而上学的な本質は、ヘーゲルの「精神の現象学」のうちに、次のような過程として、先駆的に思索されている。すなわち、無制約的な組み立てがそれ自身を整理してゆく過程、つまり、主観性として経験される人間のなす現実的なものの対象化がそれ自身を整理してゆく過程が、それである。唯物論の本質は、技術の本質のうちに秘め隠されているのである。この技術については、たしかに多くのことが書かれているが、しかしごくわずかのことしか思索されていない。技術は、その本質において、忘却のうちに眠る存在の真理の、存在の歴史に即した一つの運命である。「ヒューマニズムに  
つらつ」 p.81)